性の権利とフェミニズム

―アミア・スリニヴァサン『性の権利――21 世紀のフェミニズム』―

王　思遥

Amia Srinivasan
The Right to Sex: Feminism in the Twenty-First Century
(London: Bloomsbury Publishing, 2022)

Siyao WANG

1.　はじめに

本書では、性に関する問題について議論が展開されている。

性について、どのように考えるべきかという問いに対して、性は「持たれる」と同時に「行われる」ものであり、プライベートな行為であるとともに、公共的な意味を帯びた行為として捉えられるべきだと述べられている。また、性は個人的な嗜好であるとされる一方で、外部からの影響によって形作られるものであると指摘されている。

さらに、性についてどのように語るべきかについても検討が行われている。#MeToo は、セクハラや性的暴行といった性に関する被害体験が告白・共有される際に、SNS で使用されるハッシュタグとして提唱された[1)]。#MeToo 運動以降、多くの人々によって性的正義を実現する鍵として「性的同意」の重要性が強調されている。しかし、現在の「性的同意」の概念は不十分であると本書では指摘されている。セックスとジェンダー、階級、人種、権力との関係が理解されるためには、「イエス」と「ノー」、「望まれるもの」と「望まれないもの」といった単純な枠組みが超えられる必要があると論じられている。

2.　著者について

St John's College（2019）によれば、本書の著者であるアミア・スリニヴァサンは、オックスフォード大学で社会政治理論を専門とする教授であり、主に認識論、フェミニズム理論、政治哲学を研究する哲学者である。また、彼女はイギリスの文学雑誌 *London Review of Books* の特別編集者も務めている。

3. 本書の概要

本書では、現代社会における性の意味が探られており、新たな世界への希望を基に議論が展開されている。性が政治的現象として捉えられ、差別と嗜好、ポルノグラフィと自由、レイプと人種差別、懲罰と責任、学生と教師、快楽と権力、資本主義と解放といったテーマと関連付けて論じられている。

本書の最大のテーマとして、性の権利とフェミニズムの関係性が挙げられている。女性がいかにして社会、文化、政治の領域で性の権利を獲得してきたのか、そしてこれらの権利が彼女らの生活やアイデンティティにどのような影響を与えているのかが論じられている。

まず、歴史的観点から女性の性の権利の変化が考察されている。多くの国で法律上は女性の性の権利が保障されているように見えるが、実際には女性たちが依然として多くの困難に直面していることが指摘されている。その困難には、社会的な観念からの圧力、性差別、セクハラ、性暴力などが含まれることが説明されている。

さらに、女性が性の権利を求める際に直面する具体的な困難が述べられている。法律上では女性の性の権利が保障されている一方で、それが無視されたり侵害されたりする例が少なくないことが指摘されている。また、女性の性行為や性的欲求に対する社会的偏見が根深く、性の権利を主張する際には孤立感が抱かれやすい状況が説明されている。

本書では、フェミニズムが女性の性の権利に与えた影響についても議論されている。著者は、フェミニズム運動によって、女性に性の権利を追求するための理論的基盤と実践的経験が提供されたと述べる。また、フェミニズムによって、女性が父権制に基づく伝統的な観念や性別役割に挑戦することが支持され、女性の社会的地位の向上が主張されてきたと指摘している。

最後に、女性の性の権利の未来についての展望が示され、具体的な提案が述べられている。女性の性の権利が真に実現されるためには、社会全体の努力が求められている。女性の性の権利が侵害されないよう、政府が法律や政策を策定する必要があると指摘されている。また、教育機関による男女平等や性の権利に関する教育を通じて、相互の尊重と理解の深化が求められている。さらに、メディアには、包摂的で平等な社会環境を築くために、正しいジェンダー観や価値観を普及する役割が期待されている。

3.1. フェミニズムとインターセクショナリティ

本書では、フェミニズムとインターセクショナリティの関係性が議論されている。「インターセクショナリティ」という言葉は日本語では「交差性」とも訳されるが、この言葉は 1989 年にキンバリー・クレンショーによって整理され、改めて提示されたものである（Crenshaw 1989）。この概念の背後には、黒人女性が人種差別の議論において白人女性よりも劣ったものとして扱われるだけでなく、性差別の観点からも黒人男性から周縁的な存在として追いやられるという現実がある。この状況は、性差別と人種差別が交差する地点（インターセクション）で、両方の車に轢かれるというイメージで説明されている。この概念は現在、人種やジェンダーに限らず、性的指向、階級、民族、能力や障害の有無など、さまざまな社会的属性が複合的に差別を

引き起こす仕組みを考えるために広く用いられている（宇多川 2022）。本書では、主に階級と人種の2つの視点から議論が展開されている。

まず、フェミニズムが男性に対する陰謀であるという語りが存在することが指摘され、それに対して著者は否定的な態度を示しつつ、特定の階級や人種の男性に陰謀論が存在することが指摘されている。具体的には、レイプという議題が取り上げられ、虚偽告訴の問題が議論されている。白人が支配する地域では、褐色や黒色の肌を持つ女性は性欲が強いと見なされ、彼らがレイプされることはあり得ないと判断されることが多い。そのため、仮に彼女らがレイプされたとしても、その被害の訴えは信用されないと考えられている。また、現代アメリカにおいては、黒人女性が特に警察からの嫌がらせや性暴力を受けやすいと指摘されている。子供と引き離されることを強いられ、DV の被害を警察に通報しても、信頼されないことや侮辱されることが頻繁に起きていると述べられている。黒人女性が親密な関係の中で暴力を受けやすい状況は、国家権力によるものだと指摘されている。このような背景として、黒人男性の高い失業率が存在し、それが原因で黒人女性がパートナーに殺害される割合が高いことが説明されている。

また、白人による黒人の性行為に対する偏見が不安を生み出す傾向があると指摘されている。白人によって黒人男性がレイプ犯として描かれる一方で、黒人女性がレイプされることはあり得ないとされている。その理由として、彼女らの性欲が強く、レイプは彼女らの性欲を満たす行為に過ぎないと判断されるためであると説明されている。この結果、黒人女性が男性から受けた性暴力を訴えるたびに、彼女らが他の人種からの黒人全体への偏見やステレオタイプを強めていると非難され、人種差別をしている国家（ここではアメリカを指す）に保護を求めていると見なされる。このような状況により、黒人女性は二重の従属的地位に追いやられると著者は指摘している。同時に、黒人女性に対する「性早熟」というステレオタイプがあることで、一部の黒人男性によって少女を含む黒人女性が虐待されることが、彼女らの自業自得だと見なされる傾向が強まっている。

このような差別的現象はインドにも存在すると指摘されている。インド社会では、カースト制という身分制度が存在し、その中でヴァルナと呼ばれる特有の社会秩序が確立されている。それは社会の機能の4つの階層的区分に基づき、それぞれの階層が特有の義務と機能を持つとされている（アントニー・古澤　2021）。インド社会における低カーストの女性も、アメリカにおける黒人女性と同様に淫らな存在と見なされており、レイプされることはあり得ないとされる傾向がある。実際の事例として、2020年9月に北インドのウッタル・プラデーシュ州で19歳の女性が4人の高カーストの隣人にレイプされた事件が挙げられている。その後、彼女は病院で亡くなったが、低カーストであることから警察は通報を否定し、家族による抗議も無視されたと述べられている。

このような不公平な現象に対し、著者は一部のフェミニストが掲げた「女性を信じる」というスローガンに共感を示す。しかし、ここには危うさもあると筆者は述べる。黒人に対する偏見を考えると、黒人女性は特に黒人男性から性的被害を受けやすい状況に置かれており、同様に、インド社会では低カーストの女性が同じ低カーストの男性から性的被害を受けやすい状況

に置かれていると述べられている。「女性を信じる」というスローガンが、こうした事実を容易に覆い隠してしまう可能性があると指摘されている。

例えば、白人女性が黒人男性の性犯罪を通報した場合や、高カーストの女性が低カーストの男性を告発した場合、それを無批判に信じることで、低階級や下位カーストの女性たちがさらなる性暴力の危険に晒される可能性があると述べられている。これらの女性たちは同じ人種やカーストの男性から暴力を受けているが、その被害を訴えること自体が困難である。黒人男性や低カースト男性の性欲が強いという偏見に結びつけられることで、これらの女性たちにも同様の偏見が内面化されると説明されている。この結果、黒人女性や低カースト女性がレイプされることはないとされる一方で、実際には彼女らがより高い性的リスクに晒される状況が生み出されていると指摘されている。

著者の視点では、ジェンダーに焦点を当てた文脈では、男性が明らかにより大きな発言権を持っている。しかし、人種や階級などの要素が加わると、状況はさらに複雑化する。元々社会的地位が低い黒人女性は多重的な抑圧を受け、さらに弱い立場に置かれ、主流のフェミニズム運動においても無視される傾向にある。インターセクショナリティ理論によれば、「純粋なジェンダーによる抑圧」に基づくフェミニズム運動は、常にその集団内で最も抑圧の少ない人々（例えば、高階級に属する白人女性）を助ける傾向があり、黒人女性などのより弱い立場に置かれる人々の困難が周縁化されるのだ。

こうした現状に対して、国や政府が周縁化された女性たちに発言権を与えるべきであると本書では提唱されている。また、フェミニズム運動が性別のみに焦点を当てるのではなく、階級や人種などの要素にも目を向けるべきであると主張している。最後に、社会全体が性別だけでなく、人種や階級といった多角的な視点から社会問題を捉えるべきであると指摘されている。

3.2.　フェミニズムとポルノグラフィ

ポルノグラフィとフェミニズムの関係性については、「ポルノグラフィはフェミニズムを殺したのか」というテーマが著者によって掘り下げられて考察されている。

フェミニストによるポルノグラフィに対する見方は、三つに分類されている。それぞれ、反対派、支持派、そして中立派である。反対派には、ポルノグラフィが父権制を強化するものであり、それは性差別の一形態であるとみなされている。女性嫌悪の内容が描写されることによって、女性の持つべき平等な市民としての地位が破壊され、市民権が奪われていると主張されている。一方、支持派の立場からは、女性の選択の自由が支持されるべきだとされ、性に関する選択を行うことで汚名を着せられるべきではないと考えられている。中立派の立場では、反対派と支持派の意見の間でバランスを取ることが求められている。また、レイプなどの性的暴力を減少させることの重要性が強調されている。

著者は反対派の意見に賛成しつつ、「ポルノグラフィは『言論の自由』である」とする主張に対して反論を展開している。「言論の自由」は表面的な概念に過ぎず、実際には支配階級の自由を守るための選択的なイデオロギーとして機能していると指摘されている。また、「言論の自由」が現存する権力構造を支える役割を果たしているとも述べられている。

ポルノグラフィは父権制のもとで構築された性別役割を強化し、心理的な刺激を繰り返すことでジェンダーの社会化を促進していると考えられている。女性にとって、ポルノグラフィは自己認識の手段となり得る一方で、抑圧的な環境で受動的に形成された欲望を覆い隠す手段としても機能している。特に、ポルノグラフィ産業で働く女性の言論の自由が保障されにくい状況が指摘されている。法律の規定にかかわらず、ポルノグラフィが製造され、購入され、販売され続ける現実が存在する。フェミニストにとって重要とされているのは、ポルノグラフィに対する法的規制ではなく、この産業で働く女性たちの権利をどのように保障し、彼女らにどのような影響を与えることができるかという点であると述べられている。

また、性教育が性別役割の強化から生じる性差別を解消する鍵と見なされているなかで、著者はその意見に否定的である。その理由として、教育そのものが支配階級によってコントロールされる可能性があるため、父権制の構造的な問題を教育により根本的に解決することは難しいと説明されている。映像化された性（ポルノグラフィ）は、性が持つ可能性を広げるように見えるものの、人々の性に関する想像力を閉ざし、依存性や怠惰、形式化をもたらしていると著者は指摘する。性に関する想像力は模倣行動にとどまり、新しいものを生み出すことが困難になっている。

著者は性に関する想像力を与えること、性に関する新たな意味や形式を生み出す能力を提供することが､性教育には求められていると述べている｡性教育が単なる模倣行動に終わる場合、それは消極的な教育であるとみなされる。性教育は、「性の真理」を断言するものではなく、性そのものが何であり、将来的にどのように変化しうるか、その決定権を若者自身の手に委ねるべきであると指摘されている。

ポルノグラフィに関する問題の核心は、その存在自体ではなく、どのように利用され、誰がその言説の主導権を握っているかにあるとされている。著者は、言説の主導権を奪い、多様な視点や経験を含む物語を作り上げることが、ジェンダーナラティブを変革するために重要であると述べている。現状のポルノグラフィに対して著者は消極的な態度を示しているが、それは法律による禁止を求めるものではなく、産業従事者の権利保障を求めるものである。具体的には、報酬の透明性や搾取のない制作プロセスの確立が挙げられている。

最後に、性に関する想像力の限界と可能性について議論が展開されている。性に関する想像力は現存する文化や経験によって制約されているものの、芸術や哲学、実践を通じてその限界を突破する新しい道が模索できるとされている。

この議論から、未来のフェミニズム運動に対して具体的な解決策が提示されている。まず、多様な創作者を支援し、過去の性に関する消費行動を反省することが提唱されている。次に、性教育を通じて性に関する認識を深めるだけでなく、メディアや芸術なども活用し、性やジェンダーに対するステレオタイプを教育と文化の力で変えていくべきであると述べられている。最後に、文学や映画といった表現形式を通じて既存の枠組みを破壊し、より平等なジェンダーナラティブを探求する必要性が強調されている。

3.3.　フェミニズムと性の権利

本書では、フェミニズムと女性の性の権利に関する議論も展開されている。

まず、フェミニズム運動における性の権利を巡る対立が取り上げられている。1960 年代から 70 年代にかけて、急進的なフェミニストは、性行動が父権制の支配のもとで形成されると指摘した。一部のフェミニストによって、父権制の支配に対抗するため、禁欲やレズビアンなどの行為が唱えられている。第二波フェミニズムにおいては、社会主義フェミニズムによって資本主義が女性に対する抑圧的な構造を生み出していることが強調される一方で、革命的フェミニズムによって女性に対する抑圧の核心が男性からの暴力であると主張されている。また、セックス・ポジティブ・フェミニズムによって、女性の性における主体性や性の解放が強調され、女性の性欲に対する道徳的な束縛に批判的な態度が示されている。

しかし、本書の著者は、セックス・ポジティブ・フェミニズムに対して批判的である。その視点によってミソジニー（女性嫌悪）が覆い隠されるだけでなく、人種差別や障害者差別、トランスフォビアなどの抑圧的な構造が隠蔽される可能性が指摘されている。これらの抑圧的な構造が、「個人の自由選択」というメカニズムを通じて不可視化される仕組みが説明されている。また、性欲は必ずしも私たちの感知や意識に従うものではないと指摘され、同性愛者の存在がその証拠として挙げられている。

自由選択における矛盾についても議論が行われている。自由選択は一見すると女性を解放するかのように見えるが、父権制のもとでは規律化された産物となり得ると指摘されている。フェミニズムにおいては、女性の自由な選択が尊重されるべきだが、その選択を取り巻く社会構造に対して批判的な態度を取るべきであると述べられている。女性の自由選択が父権制によって規律化されるものであるとしても、それは現状への批判を可能にする力を備えていると、著者は指摘する。

また、欲望の解放についても議論が展開されている。真の欲望解放は、理論や道徳的理想によって規制されるべきではなく、実践や生活の中で体験を通じて模索される必要があると述べられている。

本書ではこれらの議論から、フェミニズムと女性の性の権利に関する実践の方向性が示されている。まず、父権制によって規律化された制度に対して批判的な態度を取る必要があると述べられている。次に、個々の選択に対する道徳的な批判を避ける必要性が強調されている。また、競争や協力といった多様な方法を通じて、様々な分野で女性の参入を増やすことが推奨され、最終的には権力のジェンダー独占が打破されるべきだと述べられている。最後に、理論や道徳による強制的な規定に頼るのではなく、日常生活における実践を通じて欲望の解放が模索されるべきであると結論づけられている。

3.4.　フェミニズムと教育

フェミニズムと教育については、師弟間の性的関係が議論の俎上に上げられている。

著者は、師弟間の性的関係の本質的な特徴が認知的な不均衡にあると指摘する。すなわち、教師は特定のことを認知し理解している一方で、学生はそれを学びたいという姿勢を持ってい

る。両者の関係においては、この不均衡を縮小するという暗黙のルールがある。師弟関係における権力格差には、知識の権力や評価の権力が含まれると指摘されている。これによって学生の同意は、本質的に完全な自由選択とは見なされにくいとされている。そして、教師の責任として、学生による教師へのリスペクトの感情は、知識や理性へと導かれるべきであり、この感情を親密な関係の構築に悪用するべきではないと述べられている。

師弟間の性的関係は多くの場合、男性教師と女性学生の間で発生していると指摘されている。これには、父権制による女性の物化やジェンダー化された権力の不平等が反映していると著者は述べる。権力の格差によって、「性的同意」は不平等な基盤のもとでしか成立しがたい。たとえ双方の合意に基づく関係であったとしても、このような関係は、女性学生の心理状態や学校での生活に大きな影響を与え、教育環境を不安定にさせる可能性があると述べられている。教師は、教育環境の平等性と安全性を確保する責任を担うべきであると筆者は指摘している。

教育分野におけるジェンダー構造の不平等を無くすために、著者は以下の提案を行っている。まず、規則や啓発を通じて、教育分野におけるジェンダー化された権力の不平等が減少されるべきだと述べられている。次に、師弟関係における教師の倫理的責任が明確化され、権力格差による感情の濫用が回避されるべきであると指摘されている。

3.5.　カーセラル・フェミニズムと資本主義

カーセラル・フェミニズムという用語は、2007年にフェミニズム社会学の研究者エリザベス・バーンシュタインによって提唱された（Bernstein 2007）。カーセラル・フェミニズムは人身売買の根絶を目指すフェミニズム運動の一部であり、警察権力の強化や厳罰化によって、女性への暴力を制御すべきと主張する。フェミニズム運動のなかでは、批判的に言及されることが多く、本書でもその文脈で検討されている。

本書では、セックスワークやDVを中心に議論されている。

まず、フェミニストによるセックスワークに対する論争が整理されている。象徴的な論争点は、セックスワークを父権制による女性抑圧の象徴として捉えるかどうかにあるとされる。論争は、肯定派（非犯罪化）と否定派（廃絶主義）の間でなされている。肯定派は、セックスワーカーの生活の質を向上させるために、労働条件を改善し、彼女らが権限とより多くの選択肢を持てるようにすべきだと主張している。それに対し、否定派は、非犯罪化が単なる改良主義であり、父権制と新自由主義による性的商品化を支持するもので、真の解放にはつながらないと批判している。また、ここでの廃絶主義は、単に「国家権力機関を廃止する」ことではなく、抑圧を基盤とする社会システムを根本的に再構築することを求めていると述べられている。

著者は、非犯罪化と廃絶主義を「現実」と「象徴」の対立として見なすことができると述べる。セックスワークの問題解決のためには、現実的な利益（現在の生活改善）と象徴的な意味（父権制の構造への挑戦）の間での均衡点を見つける必要があると指摘されている。過度に理想化したり現実的なニーズが無視されたりすることを避けるべきだとされている。そして、廃絶主義の主張を踏まえ、現在の資本主義が、家庭内での女性の無償労働や「白人特権」を維持することでその支配を強化していると指摘する。

著者は、生活や育児のために女性にお金が必要であり、セックスワークが他の選択肢よりも良い場合があり、また、女性の従属的地位が性的商品化されていれば、売春は存在し続けると述べている。この意味で、セックスワークを犯罪化することは象徴的な廃止に過ぎないという。

DV については次のように主張される。まず、ジェンダー問題に対する強権的な解決方法が、しばしば女性に対する「共通の抑圧」を想定しているという。しかし、DV の解決策として逮捕や収監が選ばれることは、暴力を振るう男性と結びついている女性たちへの配慮を欠いている。その女性たちが、暴力を振るう男性に経済的に依存している場合、警察や裁判所、監獄がその男性をどのように扱うかが、彼女たちに重大な影響を与えるからである。経済的な依存を失うことを恐れ、貧困層の女性は DV を警察に通報しようとしなくなる可能性があるということだ。また、刑務所システムが有色人種の男性に過度の罰を与え、人種差別を悪化させる可能性もあると著者は指摘している。

つまり、カーセラル・フェミニズムだけではなく、国家の強制力（例 : DV 防止法や刑務所システム）に依存してジェンダー平等を実現しようとするフェミニズムの限界が、ここでは指摘されている。このような方法は最も弱い立場の女性を傷つけることが多く、また、抑圧がジェンダーだけの視点で説明されることによって、人種や階級などの要因が交錯する現実が無視され、最底辺の女性の困難が深刻化される可能性があるというのが、著者の指摘である。そして、この文脈で＃MeToo 運動の限界も示される。悪い男性を罰することで問題を解決しようとする一方、多くの女性を不自由にしている構造的原因が覆い隠されていると著者は述べている。

フェミニズムと資本主義をめぐる議論から、セックスワーク問題に対しては非犯罪化が進められるべきであると著者は主張している。同時に、セックスワーカーの労働条件と社会的地位が段階的に改善され、将来的にセックスワークが廃止されるための基盤が整えられるべきだとも述べられている。さらに、フェミニズム運動においては、人種・階級・ジェンダーの抑圧が同一システムの異なる側面として捉えられるべきだとも指摘されている。著者は、初期フェミニズムの取り組みを参考に、シェルターや教育センターなどのコミュニティ支援ネットワークが構築され、国家の強制力への依存を減らすべきだと指摘する。

4.　考察

本書では、フェミニズムとインターセクショナリティ、ポルノグラフィ、性の権利、教育、資本主義をめぐる議論が展開されている。本書では、伝統的なジェンダー観念が批判され、性と権力、欲望の関係性について深く掘り下げられている。

フェミニズムは、性差別、性搾取、性抑圧を終わらせ、ジェンダー平等を促進することを目的とした社会理論および政治運動である。本書では、性差別への批判のみならず、それに対する分析や、下層階級の人々における性の権利の推進にも重点が置かれている。

「フェミニズム」という言葉が日常生活に浸透する一方で、多くの混乱も生じている。このような文脈において、本書はタイミングよく登場した。本書では、フェミニズム運動の核心的なテーマである「性」に焦点を当て、女性グループ内部のさまざまな分裂や矛盾について分析・

考察されている。たとえば、男性をフェミニズムの議論に含めるべきか、それとも「男嫌い」を掲げて無視すべきか。また、セックスワークを法的に禁止すべきか、あるいはセックスワーカーの労働条件を改善すべきかといった議題がある。その中でも特に重要な問いとして、若い女性のジェンダー意識が向上している一方で、女性を取り巻く性に関する環境が悪化しているという矛盾を、どのように理解し、対処すべきかが挙げられている。

本書では、レイプ、ポルノグラフィ、性の権利などの議題を分析する中で、男女差別や人種差別がもたらす社会的影響を明らかにし、現在のジェンダー政治の構造の背後にある不公平な現象について論じられている。

現在の権力構造においては、男性、特に階級の高い男性が主導権を握っていると指摘されている。たとえば、アメリカの富裕層の白人男性は、自らが法律上優遇されていると信じているが、レイプに関しては、大衆が女性の言い分を信じる傾向の中で、自身への法律の適用を懸念するようになっている。それでも、こうした男性は実際には法律上優遇されている。

また本書では、これまでのフェミニズムがジェンダーに特化しすぎていると批判されており、インターセクショナリティ（交差性）の視点が必要であると主張されている。つまり、ジェンダーだけではなく、人種、性的指向、階級、民族、障害の有無など、さまざまな社会的属性がもたらす差別の複合的な影響を考慮すべきだと述べられている。本書では、現在のフェミニズム運動がジェンダーに焦点を当てるあまり、集団内で最も抑圧の少ない人々（例：高い階級の白人女性）が優先され、黒人女性などより弱い立場にいる人々の困難が周縁化されていると指摘される。たとえば、「女性を信じる」と主張するフェミニズム運動において、白人女性の主張と有色人種の母親が息子の無実を訴える声のどちらを信じるべきかという問題が浮き彫りになる。これは、現在のフェミニズム運動の限界を明らかにした例といえる。

性の権利は人権そのものであり、すべての人が持つべきジェンダーに関わる基本的な権利である。性別、性的指向、婚姻状況などに関係なく、すべての人が平等に尊重されるべきだと主張されている。この権利は、婚姻生活だけでなく、生理的、心理的、社会的生活の多くの側面に関わっており、すべての世代において重要であるとされるべきだと考えられる。

本書では主にアメリカにおけるフェミニズムについて議論が展開されているが、それが本書の議論の限界でもあると考えられる。アメリカのフェミニズムについては皮肉を込めた表現も見られる。アメリカのフェミニズムの歴史は、長らく世界で最も力強いフェミニズムの形態として存在してきた。これは、一部の女性が国家権力を利用し、最終的にはその権力を超えて成功を収めた歴史でもある。

また、著者のフェミニズム理論には独自の視点があるが、理論と現実の間には常にギャップが存在していると考えられる。フェミニズムの限界に対して対策が提示されているが、それが現在の社会において現実的かどうかには疑問が残る。本書の中では、フェミニズム理論が女性たちの実生活から離れた位置でその生活の真の意味を語ろうとするものであり、それが多くの女性にとって役立つ言葉ではないと指摘されている。著者は独自の視点で対策を提示しているが、それもあくまでも理論に過ぎないと考えられ、現在の女性の立場を変えることが本当に可能かどうかには疑問が残されている。

最後に、本書はアメリカを背景にフェミニズム理論についての議論が展開されているが、中国や日本を含む東アジアの国々の状況やフェミニズム運動の展開については言及されていない。このため、本書からグローバルなフェミニズム運動への示唆を得ることは難しいのではないかと考えられる。

〈注〉

1）知恵蔵 mini，2017，「＃MeToo」，コトバンクホームページ，（2025 年 1 月 14 日取得，https://kotobank.jp/word/metoo-3198740#w-1823655）．

〈文献〉

アントニー・スサイラジ／古澤夏子，2021，「カースト制度と職業――不可触民タップ奏者の事例から」『アカデミア 人文・自然科学編』21：241-54.

Bernstein, Elizabeth, 2007, “The Sexual Politics of the ‘New Abolitionism’,” *Differences*, 18(5): 128-51.

Crenshaw, Kimberlé, 1989, “Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics,” *University of Chicago Legal Forum*, 139-68.

St John's College, 2019, “Professor Amia Srinivasan,”, St John's College, Oxford: University of Oxford, (Retrieved January 29, 2025, https://web.archive.org/web/20191013045201/http://www.sjc.ox.ac.uk/discover/people/prof-amia-srinivasan/).

宇多川妙子，2022,「フェミニズム、ジェンダー研究とインターセクショナリティ――『女性』概念をめぐって」『北方民族文化シンポジウム網走報告書』36：1-6.